
【The sword/magic world】VRMMOテスト

年齢をとっくに過ぎていたり過ぎていなかったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなもものようなりんご的ななにかだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【The sword/magic world】VRMMOテスト

【Nコード】

N4196Y

【作者名】

テスト中の小説集書いてる適当な年齢をとくに過ぎていたり過ぎていなかったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなものなりんご的ななにかだと思わせてジェル状の物体その3

【あらすじ】

VRMMOもの小説のテスト中【The sword/magic world】。テスト中につき更新速度が月2 3程度になるかもしれません。閉じ込められるタイプ。

経験止め

飛び掛ってきた【サベッジ・ラビット】を一閃する。そのシルエットはポリゴンとなり砕け散った。

『経験値を30取得しました。20G取得しました。兎の毛皮を取得しました』

草原で独り佇む白い服に身を包んだ男は、視界の端に流れるログを一瞥したあとにふと顔を上げる。

「そろそろ飽きたな」

VRMMOに閉じ込められて2年。彼はひたすら【始まりの村】でモンスターを狩り続けていた。

~~~~~loading~~~~~

かつてこのゲーム【The sword/magic world】通称【TSMワールド】は初のVRMMOとして発売され、問題なく運行していた。

初のVRMMOゲームということで、プレイヤー達は大挙して押し寄せた。その中にはゲーム初体験のものも多く、ゲーム界に新たな風を巻き起こすはずだった。

発売から10日。不正アクセスしようとした者達が最後のロックを通過しようとした時、ゲーム内に異変が起きる。

キャラクターは全て初期化され、プレイ中のプレイヤー約20万人がこの世界へ閉じ込められた。

実験中に判明していることだが、VRMMO用の【タンク】はゲーム中に開ける事で精神に異常をきたす、つまり廃人になる。もちろん【タンク】が作動不良になった際も同じだ。

脳からの電気信号を首から行き来させているための副作用だとも言われている。

人が一人入れるほどの大きさのハード【タンク】はこのような場合に備え、外部から栄養を注入したり肉体を強制的に運動させることで筋肉の低下を防ぐ機能がついている。さらに自家発電機能付きで、最低1年は持つと言われている。

もちろんハード本体の説明書にも危険性は書いてあるものの、そこまでじっくり読んでいる人は少ない。

そもそもゲーム自体を終了させればいいのだが【TSMワールド】はハッキングの影響がアクセスが出来なくなっている。

開発会社や運営会社は必死になり原因の究明をしているが、いつこうに事態は進まない。

【タンク】は全て回収され、プレイヤーが入っているものは政府管轄の下に結成された組織【TSM対策本部】の拠点に收容されている。

事件から2年、内部との連絡手段こそないものの、ゲームセンターの【タンク】などには2Dの液晶と連動しているものがあり、内

部の様子をつかがうことは出来た。

プレイヤー達は今日もそこで生活をしている。

~~~~~loading~~~~~

彼は今日も液晶画面を見ている。

カチカチとクリックの音が暗い空間に響く。

彼はMMORPGをただひたすらにやりこんでいた。

俗に言う不登校児で、いじめられた経験はないがなんとなく行き辛くなっていた。

高校1年生としては老けた顔をしている彼は、そのゲームでは指折りの強者であった。

課金をせずに、ただひたすらにレベルを上げるその姿に【探求者】の異名で呼ばれていた彼はギルド戦の真っ最中だった。

『うっは、マジっえー』

『探求者が来るぞ！』

『ちょwww死んだwww』

相手ギルドの悲鳴を聞きながら突き進む。ソロギルド【あ】と大手ギルド【妖精の集い】の戦いは互角の死闘を演じていた。

ルールはどちらかの大將を倒せば終了。120分たっても決着が付かない場合は人数の多いほうの勝利となる。

最大ギルド人数は100人で、トーナメント方式で勝ち上がり優勝したギルドはゲーム内最大の都市を統治する権利が与えられる。

探求者は対戦相手のギルドマスター【閃光】のホルマリンを探していた。ホルマリンの武器は両手斧で、圧倒的なスピードをもって突撃してくる男キャラクターだ。

現在レベルをカンストしている【探求者】のれいんには及ばないが、レベル98という高レベルなアタッカーである。

彼の指先が反応する。高速でダブルクリックをして転がる。そこを両手斧が一閃していた。

冷や汗をかきながら詠唱を開始する。ホルマリンはなおも攻撃を続けるが、あたらない。

彼は勘だけで避け続ける。詠唱が終わったキャラクターの周りが吹雪になる。お得意の古代魔法【エターナ・・・】。

バチン、と電源が切れる。おそらく親がブレーカーを落としたのだろう。

「飯、食うか」

おそらく負けただろう。割り切って下へ降りていく。家族は5人、父・母・俺・妹・弟で構成されている。

俺はすでに家族ではないもの扱いされていて、金だけ渡されている。

適当に食事を終えた俺は、VRMMOを買うために外に出ても恥ずかしくない程度に身だしなみを整えて出かける。

【The sword/magic world】は発売初日で売り切れてしまい、俺は次回入荷での予約をしていた。

今日入荷されたと携帯電話に留守電が入っていたため受け取りに行くのだ。

自転車に乗って駅前に行くが、人通りは少ない。平日の昼間だから当たり前だろう。

なお、学校は今日が創立記念日のために休みだ。あっても行かないが。

横道に入り、少し入り組んだ場所にあるゲーム店に入っていく。

「よお、れいん。途中で消えたけどどうしたんだ？」

数少ない小学校からの友人の高瀬 春樹。外見はナンパな男だが、こう見えても【妖精の集い】のサブマスターだ。

「ブレーカーが落ちてな。学校はどうだ？変化とか」

このゲーム店は春樹の趣味で経営している。資金は親が捻出しているようだ。

「夕貴がないこと以外は変わらずいつも通りだよ」

軽く咎める口調ながらも答えを返してくる。夕貴とは俺のことだ。

「そうか。【The ^{ザ・} ^{ソート} Word / ^{オフマジック・} magic ^{ワールド} World】を頼む」

「はいはい、これね。キャラ作ったら連絡してよ、一緒に狩ろう」

「了解、またな」

箱を受け取り、外に出る。止めた自転車のかごに入れる。自転車をこごと足を置いたとき、前から人影が近づいてくる。

自転車をうまく操り、よこをすり抜けて漕ぐ。楽しみなはずなのに少量の違和感が彼の体を支配する。

普段ならその違和感で立ち止まっただろう。しかし、彼の違和感はずっと嫌な感覚ではなかったために気にしなかった。

「それにしてもさっきの女の人、春樹の彼女か？無駄に美人だったか」

そんなことを思いながらも足を止めずに家路を急いだ。

~~~~~loading~~~~~

家に戻り電気をつける。箱を開けてソフトを【タンク】にインストールする。



インストールしている間に【タンク】に栄養液をセットして説明書を読む。

「暗黒の時代、各国は大量の兵士を投入して魔王とモンスターを討伐した。しかし人口が減り、衰退していく各国はある方法を思いつく。その方法を実行するために【始まりの村】に召喚陣を刻む。はるか異世界より戦いの素質を持った者達を呼び寄せようとしたのだ。そして今日も何人もの人間が異世界へと呼び出されている」

なるほどなるほど、プレイヤーが異世界人な訳だ。

「アクティブスキルとパッシブスキルがあつて、それぞれスキルごとに熟練度がある。へえ、1000溜めるとカンストか。アクティブ9個にパッシブが4個、それとユニークスキルが2個セットでき、スキル設定画面で変更可能。スキルは生産スキルと戦闘スキルにわかれているらしい。使用方法はスキル名を言葉にする」

どんどんと読み進めていく。

「最大レベルが1000。レベルキャップで200が最高。初めに魔法使いか戦士か選ばなきゃいけないのか。種族はヒューマン・エルフ・ドワーフ・獣人の4種類。レベルが上がることに一定のステータスが上がる、ふむ。」

ドワーフは多分生産職だよな。種族ごとの特徴はヒューマンがINT、エルフがAGL、ドワーフがDEX、獣人がDEFに若干の補正が付くらしい。

「ステータスはHP・MP・STR・INT・DEF・AGL・DEXの7つ。それぞれHPが体力、MPが魔力、STRが力、IN

Tが知力、DEFが耐力、AGLがすばやさ、DEXが器用さを表している」

注意点は特になしかな。

「メニュー画面は指を鳴らして「メニュー」と唱えると出てきて、慣れてくれば念じるだけでも出てくるのか」

ちょっと面白そうだ。

「これが大事かも、ユニークスキル。登録時とゲーム内で取得でき、他の人と被ることはありません。ゲーム内で取得したユニークスキルは取得できる人数が限られています」

一通り目を通した後に、ネットで攻略情報を確認する。

【始まりの村】周辺のモンスターの情報を叩き込む。インストールが終わると同時に俺は【タンク】へと飛び込んだ。

~~~~~loading~~~~~

真っ白い空間。どこか機械的な少女が突然現れる。

『種族と戦闘方針をお選びください。アバターはプレイヤーの顔を基にして平均化して作成します』

「とりあえずヒューマンで魔法使い」

まずはためしだろう。戦えそうならまた作り直せばいい。

『了承しました。プレイヤー名を教えてください』

「れいん」

普段のプレイヤー名を言う。つぎ作るときは変えよう。

『了承しました。登録しました』

真っ白な空間に機械音が響く。

『それでは良い旅路を』

目には激しい閃光が映る。次に目を開けると【始まりの町】にいた。

「始まりの町です、いらっしゃい」

にこりと愛想良く笑顔で手を振ってくる案内人。とりあえず村長に会いに行く。

「わしgggツが・・・・・・・・ツ我・・・・・・・・そんty・・・・・・・・」

突然ノイズが走ったかと思うと、いつの間にか白い空間に戻っていた。

~~~~~loading~~~~~

バグかと思いつつ辺りを見回す。そこには先ほどの機械的な少女が出現する。

『キャラクターが自動削除されました。キャラクターを作り直してください』

運営側のバグ、かな？とにかくもう一度作り直してみよう。

『種族と戦闘方針をお選びください。アバターはプレイヤーの顔を基にして平均化して作成します』

「種族はエルフ、戦士タイプで」

『了承しました、プレイヤー名を教えてください』

「r.....」

その時、背筋に悪寒が走る。俺はいつも通りにその勘を信じて進む。

「（タ貴・・・タ・・・）イヴ」

『プレイヤー名：イヴ。よろしいですか？』

少女が念を押してくる。やはり勘は正しかったと思いつつ、頷く。

『了承しました。登録しました』

『これからこの世界で貴方は様々な困難に出会うでしょう。それを仲間と共に切り開いてください』

嫌な予感を感じ振り返る。少女が悲しそうに微笑んでいた。声を

かけるために口を開く。

「」

声になったのかなかったのか。そのまま閃光に包まれていく。少女は驚きながらも悲しみが薄れたような、そんな気がした。

~~~~~loading~~~~~

【始まりの村】についた俺はその人込みに埋もれてしまう。

「おい！なんだよ！いきなりキャラクターが消えたぞ！GMコールもできねえ！」

「バッカ、ログアウトボタンもねえんだよ。そっちのほうที่สำคัญだろうが。まあ、どうせそのうち直るだろ」

「確かに、それならもうしばらく待つてこようぜ」

我先にフィールドへ繰り出していく。

俺は案内人がいなくなったことに疑問を抱きつつ、メニューを表示してみる。

指を鳴らして「メニュー」とつぶやく。目の前に横40cm縦20cm程度の枠が出てくる。

上から【ステータス】【スキル設定】【アイテム・装備】【ギルド】【フレンド】【ヘルプ】【ログアウト】【GMコール】と並んでいる。

上の5つは問題ないようだが、下の3つは黒く表示されていて押しても反応しない。

ステータスを見ると、キャラクター名、戦闘スタイル、各種ステータスが出てくる。

いったん戻り、スキル設定へと変更する。そこにはユニークスキルと思しきスキルと、戦士系の初期スキルが入っていた。

「カウント・ストップ【経験止め】」ね。効果は常時経験値上昇を止めて、経験値を溜めることが出来る。溜めた経験値は1日ごとに利息が付与され、利息は熟練度依存。早い話が銀行のようなものか」

経験値は1レベル単位で引き出せるらしい。これ何年も溜め続ければ最強のユニークスキルなんじゃ……？

とにかくモンスターを狩らなければ意味がない。クエストを後回しにしてゲーム内の最弱モンスター【ジェル】を狩りにいく。

既にまわりのプレイヤーはレベルが上がったのか別のモンスターを狩りにいているらしい。

【ジェル】はSTR・AGLが低く、DEFが高い。ゆるゆると動くモンスターに初期装備の剣で確実にダメージを与えていく。

「経験値を5取得しました。3G取得しました。にゅぷにゅぷした液体を取得しました」

ログが右端で流れている。そのまま【ジェル】を20体程度狩る。

一度村に戻り、アイテム画面を開く。いくつかのアイテムが道具袋のなかを閉めていて、無限に入るとはいえこれからのことを考えると気が重い。ソート機能がなければもうアイテムなんて見つからないんじゃないだろうか。

そのまま宿屋へと赴き、20G渡して宿泊する。宿屋は階段で異次元につながっていて、プレイヤー一人一人別の場所へと泊まることになる。例外はない。

そして、悪夢の最初の日が幕を閉めた。

~~~~~loading~~~~~

それから数ヶ月。開始して1ヶ月ほどで【始まりの村】周辺にプレイヤーは一人もいなくなった。

その間、永遠と【始まりの村】のレベル1からレベル20までのモンスターを狩り続けた。

その日もポップした【ジェル】を瞬殺する。最早我流とも言える剣術の型が出来上がっていた。

『経験値を5取得しました。3G取得しました。ユニークスキル【ジェルハンター】を取得しました』

そのログが流れた瞬間、動きを止めてスキル設定画面に移る。

【ジェルハンター】     ハンターは一定の対象を1万体制すことで取得することが出来る。対象モンスターへの攻撃ダメージが%で

上昇。上昇は熟練度依存。

「ジェル・・・もう1万体も倒したのか・・・」

遠い目をしながら今日もまたイヴは【始まりの村】でモンスターの狩り続ける。



## 始祖の守護者

「オッス！俺、雨宮夕貴ことイヴ。ついに経験止めをカンストしたぜ！」

ひゅるるゝと寒い風が吹く。

「まあ、NPC以外いないから仕方ないか」

この間、この周辺の全てのハンターの熟練度がほとんどカンストした。

長かった、長かったよ……。まだ【ラビットハンター】だけ熟練度998だけど。

「もう皆かなりレベル上がってそうだよなあ」

感慨に浸りながらも歩く。草原を模したオブジェクトは、風に揺られて右へと凪いでいる。

飛び掛ってきた【サベッジ・ラビット】を一閃する。そのシルエットはポリゴンとなり砕け散った。

『経験値を30取得しました。20G取得しました。兎の毛皮を取得しました』

草原で独り佇む白い服に身を包んだ男は、視界の端に流れるログを一瞥したあとにふと顔を上げる。

「そろそろ飽きたな」

経験からおそらくあと100体と少しでカンストするだろう。

「【始まりの村】でやることもなくなっただし、どうしようかな」

飛び掛ってくる【サベッジ・ラビット】を次々と切り捨てていくレベルは20まで上げてあり、アクティブスキル【サーチ】を使用する。

MPが少量へって、周囲のモンスターの位置が赤く表示される。

「次から次へと・・・今日は多いな」

普段は群れていても10匹程度なのだが、今日は周囲に30匹はいる。

「面倒な・・・」

赤いシルエットに突撃して串刺しにする。

ポリゴンとなるのを確認して次々と倒していく。数十秒後には赤いシルエットは1つを残して消えていた。

そつとそちらを向くと兎の5倍程度の巨体を誇る【サベッジ・ラビット】よりはるかに大きい【ブラック・ラビット】がいた。

攻略情報では【ブラック・ラビット】は【サベッジ・ラビット】の上位種で、【始まりの村】のボスモンスターだったはずだ。

スキル設定画面を出し、倒しているうちに上がっていた【ラビットハンター】に目を向ける。

【ラビットハンター】      ハンターは一定の対象を1万体制すことで取得することが出来る。対象モンスターへの攻撃ダメージが%で上昇。上昇は熟練度依存。現在49%上昇。

999の熟練度のままとまっている。1000になると1000%上昇になるのだが・・・。

「仕方ないか」

アイテム・装備画面に変えて武器を初期武器初心者剣からラビット・ソードに変更する。

ラビット・ソードは【サベッジ・ラビット】から低確率でドロップし、効果はAGL弱上昇と兎モンスターへのクリティカル率2倍というものだ。もちろん初心者の剣より武器攻撃力は高い。

「はっ！」

【ブラック・ラビット】に斬りかかる。左手に握った剣を下から一閃。

そのまま添えていた右手で握り、燕返し。

これはただのプレイヤースキルだ。そのままバックステップして敵の噛み付きを避ける。

「背後に回ると砂かけが・・・」

背後に回って足が振り上げられたところへ剣を突き刺してバックステップ。

敵は自身の体重で剣を足に深く突き刺す。【ブラック・ラビット】のHPは既に2割を切っている。

「まあ、初心者用のマップだしな」

敵はうなり声を上げながらも激痛に悶えている。

貫通ダメージが入っているのか、HPは徐々に削られていく。

「悪いな」

まったく悪びれもせず剣の刺さった足を蹴飛ばす。最後のHPが削られ、モンスターはポリゴンとなり碎け散った。

『経験値600を取得しました。400G取得しました。黒兎の毛皮、ブラック・ラビットの魂を取得しました』

ログを見て頷く、そこへ新たなログが出現する。

『称号【始まりの村の英雄】を取得しました』

称号とは、特定の条件を満たすと与えられるもので、ステータスに補正が付く。この条件は【ブラック・ラビット】の討伐だと記憶していた。

「あと数体倒したら都市までいこうかな。多分プレイヤーもいるし」

また【サベッジ・ラビット】を狩りにいく。

しばらく狩っていると異変が訪れた。

『経験値30を取得しました。20G取得しました』

『【ラビットハンター】の熟練度が上限に達しました』

『称号【始祖の守護者】を取得しました』

【始祖の守護者】？初めて見る、攻略情報にも載ってない称号の獲得ログに一瞬固まる。

すぐに帰り支度を終わらせて走る。走るとHPがごくごく微小に減っていくが、1時間走っても10%程度だから問題ない。攻略情報では走り続けるとHP1で止まるらしい。

要するにダメージさえ食らわなければ走り続けることができるということだ。

「つぶ、よつと」

最後にジャンプして両足で着地する。村の中は安全エリアに指定されていて、モンスターは入ってこれない。

念じることでメニューを出現させてステータスを見る。

称号の欄から【始祖の守護者】を選んでみる。

【始祖の守護者】始まりの村の英雄、始まりの村近辺のハンター全種類の熟練度が上限に達することで取得できる。MP以外の全ステータスが80%上昇する。この称号は1人しか所持できない。

「レア度 3だ・・・」

レア度とは称号の獲得の難しさを指し、 0から 3まである。

これらはPVPで賭けることが出来る。賭けの対象はアイテムや称号で、スキルはかけることが出来ない。

「これは隠しておいたほうがいいかな」

称号を設定すると、称号を隠す。ちなみに称号を隠すと、頭上の称号にモザイクがかかる上、ステータスを相手に表示しても称号は見えない。

「よし、じゃあ都市にでも行くか」

イヴはポジションを1つ空けて再び走り出す。向かう先は都市カルミア・・・。

~~~~~loading~~~~~

「ついた~~~~!!!!」

大声を出して城壁を見上げる。一応レベルを100にまで上げておいた。

カルミアはこのゲーム内で最大の大きさを誇る場所で、各地に飛

ぶことの出来るポータルも備え付けられている。

カルミアを拠点にするプレイヤーは多く、低レベル～高レベルプレイヤーが拠点にすることになるだろう。と攻略情報にも書いてあった。

俺は外壁沿いに門まで歩いていく。

門につくと3名ほどのプレイヤーがカルミアから出てきた。

「だから、もう諦めたらどうなのよ？」

「姉さんは黙っててよ。やっぱり初日に探しておくんだっ！……が攻略組に……こない……ておか……い。絶……なに……たんだ……」

「……」

姉さんと呼ばれたプレイヤーはしかめっ面をしながら男を見ている。男の言葉は最後が小さくて聞き取れなかった。

「ログインしてなかっただけかもしれないじゃない。それが生産職になったんじゃない？」

「生産職か！それはあるかもしれない」

「……」

男のプレイヤーはカルミアの中に走って戻っていく。さらに先ほどから無言だった少女がそれについていった。

姉さんと呼ばれていたプレイヤーはリアルの姉弟なのだろう。俺は軽く無視して中に入ろうとする。

「その貴方、ちょっといい？」

「はい」

どうやら呼びかけられたのは俺のようなので返事をしながら振り向く。

「これから狩りに行くんだけど抜けちゃって困ってたの。あの2人ほどレベルは高く無いから一緒にどう？」

『フレンド登録をしますか？』

俺はYESボタンを押す。このゲームはフレンド登録しないとパーティーを組めない仕様になっている。

「いいですけど、レベルは？」

多分モザイク称号のせいで強く見えたのだろう。この武器以外の装備も見慣れていないだろうし。

「レベル100よ。あの2人は攻略組で180程度。死ぬとペナルティがきついから安全を確保したかったんだけど、ね」

カルミアへ視線を向けてため息をつく彼女。ペナルティはレベルが5下がり、1週間ほど町から出ることが出来ない。

「俺は100程度ですよ？役に立つとは思えませんが」

100レベルにこの称号で180程度のステータスになってはいるが。

「嘘よ。称号隠してるじゃない」

あらかじめ答えを用意しておいて本当に良かった。

「これはPK対策です。弱いPKが襲ってこないでしょう？」

俺は両手を広げて大げさにリアクションをする。

「そうね。じゃあダンジョンに行きましょう。階層は70からいいわね？」

「あー、俺はダンジョン行ったことないんで役に立てないかもしれないかもじゃない」

「ずっとフィールドで狩ってたの？」

驚いた表情をする彼女。当たり前ではあるが……。

ダンジョンとは全部で1000階層で成るもので、フィールドモンスターより弱い、湧きが早い。パーティーではいい餌だが。

いまはフィールドはレベル50までのモンスターしか沸かない。ダンジョンはボスを倒さなければならぬため、どこまで進んでるのかはわからないが……。

「ダンジョンはどこまで攻略されたんですか？」

「いま176層までよ。攻略組は180〜200で、すでにレベルキヤップが付いてる人がたくさんいるわね」

もうすぐか。公式情報では200層が解放されると、レベルキヤップとフィールドが解放されるとかかいてあった。

「俺はレヴ、あなたは？」

「私はホルマリンよ。よろしく」

ホルマリンという名前を聞いて固まり、とっさにフレンドリストを見る。そこには確かにホルマリンと書いてあった。

ホルマリンが本物ならおそらく攻略組だろう。ならなぜ100レベルなのだろうか。嘘の可能性が高い、か。

「ホルマリンさん、やっぱり俺はパーティーを組みません。【妖精の集い】のギルドマスターさん、ですよな？」

確認するように問う。半ば確信しているようなそぶりに見事騙されてくれれば嬉しいのんだけど。

「そうよ、その様子だとバレちゃったみたいね。ギルド【妖精の集い】マスターのホルマリンよ、レベルは200」

心の中でガッツポーズをとりながらも、驚きを表情に出さずに平静を保つ。

まさかこっちにも【妖精の集い】があると思わなかった。ならさ
っきのは春樹だろう。

「やっぱりですか。別のゲームで【妖精の集い】のマスターがホル
マリンだったもので、カマをかけさせてもらいました」

苦笑しながら言う。春樹の姉なら手を見せても問題はないだろう。

「そう、見事に引っかけたって訳ね。あなた、れいんってプレイ
ヤー知らないかしら？うちの弟兼サブマスターの探し人なのよ。も
しかしたら貴方がもと思ったのだけど・・・」

この人 春樹
ホルマリンとハルはリアルの知り合いであることは確定した。口
ぶりからしても春樹の姉だろう。

姉が居たことに驚いてなんていないんだからねっ！勘違いしない
でよねっ！

何やってるんだ俺・・・。

「ハルさんに会わせて貰えますか？ホルマリンさんを疑うわけでは
ないのですが、直接言っただけが分かりやすいでしょうし」

気を取り直して言うと、ホルマリンは首をかしげている。まあ断
りはしないだろう。

それにしてもギルドマスターならもう少し察しがよくないとダメ
なんじゃないだろうか？そこら辺を春樹が担当してるのかもしれない。
い。

俺が率先してカルミアへと入ると、あわててホルマリンがついてきた。

~~~~~loading~~~~~

「で、ここまで来たわけだが」

途中で場所が分からないことに気づき、フレンドメッセージを送ってもらった。

この中央噴水前で落ち合う予定になったため、道中でハンバーガーらしきものを食べながらベンチに腰掛けていた。

「プレイヤー、多くない？」

そう、プレイヤーが集合場所としているのか待ち人多数。さらにそれに群がる露天が並んでいる。

しかもホルマリンと一緒にいるせいなのか、視線がすごい。

この中の1割が殺気を含んでいることを考えると背筋が凍りそうになる。

「ハルなら大丈夫よ。ほら」

指差した方向からやってくるハル。もちろん背後に無言少女が一緒だ。

ハルは少し目を動かしてホルマリンを見つける。俺は白い服に備え付きのフードを被っているためばれていない筈だ。

「姉さん！手がかりって!？」

全力で走ってきたハルに怯えつつも俺を指差すホルマリン。

「君、れいんの居場所が分かるの!」

なんでそんなに必死なんだよ・・・少し落ち着け。

「ああ、対価を払ってもらうがな」

重苦しく言うと、空気が張り詰める。ハルはこわばった心を必死に押し殺しているようだ。

ハルの後ろから金属のこすれる音がした。おそらく無言少女が抜剣したのだろう。

「この女、美人だよな」

俺はホルマリンを指差す。ハルは察したのか警戒を強めていく。それに呼応して無言少女からの殺気が強くなっていく。

当のホルマリンは「美人、美人だって・・・うふふ」と別の世界に旅立ってしまったので役に立ってはいない。

周りの人々は、遠巻きにこの空気を見守っていた。

「姉さんは、確かにそうだけど・・・」

言いにくそうに首を縦に振るハルは額に冷や汗をかいているよう

だ。

「そしてその無言少女も、可愛いよな。危なっかしい剣はしまっておけ」

無言少女は舌打ちと共に剣をしまふ。ハルの目が絶望に染まり、光を映していない。

ホルマリンも自分以外のことになると分かるのか、剣を握っているがバレバレだ。

「そう、だな……。つく、対価はなんだ！」

俺を睨みつけながらハルは促す。

焦ったら負けに決まっているだろうに。

「くつくつく、そうだな。ギルドルームで彼女達を……」

途端、俺の視界にきらめきを含んだ白光の輝きが目に入る。

俺は勘に従い大きく後ろへバックステップ。俺のいた場所には剣を振り切ったホルマリンがいた。

そちらを一瞥するとラビット・ソードを鞘から抜いて短剣の刃を受け止める。

短剣を抜いて突撃してきた無言少女が驚いた表情でこちらを見ていた。

周囲の空気が一変して俺を射殺するような視線が飛んでくる。

「くつくつくく・・・、早まるなよ。なあ、ハル？」

俺は言うなり魔法の詠唱をしようとしていたハルに視線を移す。  
悔しそうに詠唱をやめて地団駄を踏む。

「もう一度聞く、対価はなんだ。最後まで聞いてやる。ツキ下がれ。  
返答次第ではこの場にいる全員が相手になる」

周囲は囲まれていて、頭の上に【妖精の集い】とかいてあることからギルドメンバーなのだろう。

ツキと呼ばれた無言少女は警戒を保ちつつゆっくりとハルの横へ移動する。

「そついきり立つなよ。どうせ全員でかかってきても互角か俺の勝ちだ」

俺が断言すると、周囲の1人が俺に向かって剣を振り下ろしてくる。

俺は剣を斜めにして相手の攻撃を受け流し、喉を掴む。

「邪魔なんだよ。感動のシーンになる予定なんだから邪魔すんじゃない  
ねえ」

右手で振りかぶって噴水の中に投げ飛ばす。周囲の包囲網は若干だが遠ざかっている。

「感動のシーンだと？ふざけるな！早く対価を言え！」

そろそろ限界なのだろう。ハルの腕は震えている。もちろん怯えではなく怒りでだ。

仕方ないのでそろそろネタばらしをしよう。

フードに手をかけて後ろへ跳ね飛ばす。俺の顔があらわになり、驚愕しているのはハルただ1人。

「どうだ？3割り増しくらいにかっこよくなった俺は」

あごに手を当ててカッコつける。

「・・・れ・・・」

あごが外れている。あんぐりと口をあけた様は100年の恋も冷めそうだ。

「ハルもハーレムを築くだけの甲斐性があつたとは予想だにしていなかったよ」

モテるのに女性を支えるだけの強さがなかったハル。だからこそ深く愛することが出来なかった彼は遊びでしか付き合わなかった。

「れいん・・・」

「ギルドルームで彼女達を紹介、してくれるよな？」

微笑みながらサムズアップ。周囲は先ほどの落差についていけ



ていないようだ。

「れいんのアホ！」

俺は春樹の腹パンを食らって意識を手放した。

最後に、「ハル。男が涙目でも誰も得しない・・・ぜ・・・」

## 妖精の集い

「まったく、もう少し手加減しろよ」

俺はハルを睨みつけている。ハルは絶賛土下座中だ。

保護エリアでは、HPが1になると固定されていわゆる不死状態になる。

なお、保護エリアで意識がないものは保護エリア外に例外を除き、運び出せない。

保護エリアでは攻撃は出来るためにHP1のまま攻撃され続けるという暴行事件などがおきているらしい。

なお、保護エリア内では異性との行為についてすることができない。しようとするとは行動に制限が加わるらしい。

攻略情報の裏サイトでフィールドやダンジョン内、もしくはプレイヤーホームやギルドルームなら可能とかいてあった。いや、いまはそれはどうでもいいが。

「そもそもイヴも冗談が過ぎるよ」

そんなわけで、俺はギルドルームでそういうことを要求するように見せかけたことで言及されていた。

「いや、ただ正体ばらすだけじゃ面白くないだろ？」

そう、俺は面白いかどうかで判断するのだ！

「まあ、そういうやつだよな・・・」

「というわけでツキちゃん、ホルマリンさん、以後よろしく！」

俺は妖精の集いのギルドルームの一室で2人に元気よく挨拶をした。

「・・・嫌い」

「面倒ごとはごめんよ」

しかし、きつぱりと振られてしまった。非常に残念だ。

「まあまあ、とりあえず自己紹介といこうか。雨宮 夕貴、美島高校1年生だった。春樹とは小学校からの付き合いで、親友というところだな。不登校児でネットゲームばかりやっていた。キャラクタ1名はれいん。こっちではイヴ、とりあえずイヴと呼んでくれ」

俺が自己紹介を終えると苦々しげな表情をするツキ。そんなツキを無視してホルマリンが自己紹介をする。

「私は高瀬 真里。美島高校3年生だったわ。春樹の姉よ。そういえば閉じ込められた日に会ったことがあったわね。とても不登校児とは思えなかったけど・・・。ネットゲームではホルマリン。マリと呼んでもいいわよ」

おお、あの時の綺麗な人。このゲームはどんな不細工でも美人でも平均より少し上くらいの顔になっているから、本当の顔って分か

りにくいんだよな。

まあ、俺は元々が平均的な顔立ちだからあまり変わってないけど。

「……月島 舞。……美島高校2年。春樹の彼女。こつちの世界にきてから告白……。された。ゲームは初めて。ツキ様と呼んで」

「「ツキ様」」

3人が名前を呼ぶ。ツキは顔を少しゆがめていた。

「やつぱり……。嫌」

無表情ながら、なんとなく事情を察する。確かに少し春樹と似ている気がしないでもない。惹かれあった理由の一端が見えた気がした。

「感情を表に出すのが下手、か。ハルとは真逆だな。春樹がアレだけ怒るんだから大事にされてそうでなによりだよ」

片手を振って惚気はいらないよ、とジェスチャーする。

「相変わらずだね、夕貴は。改めて高瀬 春樹、美島高校1年生。ツキとは部活が一緒だったんだ。ご存知の通りゲーム名はハル。この世界でもハル。皆ハルと呼んでるね、そのまま呼んでもらえるといいな」

全員同じ高校か……。ハルとツキは予想通りだったけど、マリは予想外だった。

「それにしてもハル」

「なに？僕は今までどこにいたか聞きたいんだけど」

「マリといい、ツキといい、その美少女といい、いつの間にハーレムを形成したんだ？」

そう、ハルの肩の上には出会ったときから裸の美少女が鎮座していた。

「「え!？」」

「裸で外出とか、随分とマニアックな趣味だな」

「ちょっと、ハルということ？ツキ以外にも手を出してたのなら許さないわよ」

「・・・つふ・・・う・・・」

あれ、二人には見えてないのか？

ハルは気まずそうに渋面を作る。ツキを抱き寄せて背中を叩いてやっているところは成長したのではないだろうか？

「この子はピクシーで、1000階層のボスを倒す素質を持った人にしか見えないんだ」

理解した。なぜ俺が見えるのかは考えたくはない。

「裸でいるのはデフォルトで、服を着せようにも透き通るんだ。もちろん後天的に倒せる素質を持つ人もいる。ピクシーが僕のそばにいる理由は、僕のそばにしていると素質を持つものが現れやすいからだ  
って」

「なるほどな、そしてなんかツキにも見えてるっばいけど？」

さっきまで泣いていたツキが突然ハルの肩に乗っているピクシーを睨みつけて手で払おうとしている。

『うふふ、私への嫉妬心で称号を手に入れたみたいね。ハルのそばにしていると面白いことばかり起きるわ』

ピクシーがふわりとツキの手から遠ざかる。ハルをぎゅっと抱きしめて取られまいと必死だ。

『私はピクシー。このゲームのGM権限の一部をとある方から貰っているの。GM権限はプレイヤーを保護エリアから追放・1000階層へのワープ能力・全プレイヤーの詳細情報観覧の3つね』

「2つ聞きたい。観覧情報をプレイヤーへ教えることは禁じられているか、ワープはプレイヤーを連れて行けるのか」

『教えられないわ、教えればGM権限が剥奪されるの。ワープは1人だけなら連れて行けるわね』

「わかった」

くるりと向き直ると3人を見据える。

「俺の称号は【始祖の守護者】、【始まりの村】で2年かけて手に入れた。MP以外の全ステータスが80%アップする能力を持っている。3だ」

俺が説明すると、3人とも哑然としながら「チートだ」とのたまっている。マリは除くとして、ハルもツキもチート称号だろうに。

「僕の称号は【奇跡】、隠しパラメーターのLUKラックの初期値が高いプレイヤーに贈与されるよ。効果は3称号を持つプレイヤーが多く集まってくることと、クリティカル率100%&MP3倍&詠唱速度50%減。もちろん3称号だよ」

「・・・称号【神へと抗う者】。GM権限を持つキャラクターへの敵愾心を一定以上持った初めのプレイヤーに付与される。・・・効果・・・HP・STRが3倍になる。ボスへの毒攻撃が100%成功する。・・・3称号」

「どっちもチートじゃねえか！俺よりチートだし！」

全力で突っ込んでやる！

「なんで私だけなにもないのよ！不公平だわ！」

視界の端で拗ねてしまったマリをなだめるのに2時間ほど要したのは別のお話。

~~~~~loading~~~~~

重要 告知

いつもごらん下さっている皆様、ありがとうございます。

このたび私『テスト中の小説集書いてる適当な年齢をとくに過ぎていたり過ぎていなかったりするぺらぺらとしゃべってぺたぺたと貼る変な人のようなみかんのようなものようなりんご的ななにかだと思わせてジェル状の物体その3』

略称『ジェル状の物体その3』はユーザー名『東波 広』に戻し、連載を続けたいと思っています。

正直ネタに走っただけのこの『ジェル状の（ry』という名前ですが、いちいち入力するのが疲れました。いえ、コピペですが。

まとめて整理しないと訳が分からなくなってきましたので、連載中の小説全てを【作者：東波 広】へと移行したいと思っています。

移行日は12月1日以降を予定しています。ではこの先も楽しんでいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4196y/>

【The sword/magic world】VRMMOテスト

2011年11月21日09時42分発行